

日本分析化学会第62年会

1 はじめに

日本分析化学会第62年会は2013年9月10日から12日までの3日間、近畿大学東大阪キャンパスにて開催された。近畿での開催は大阪大学で開催された第55年会以来である。

学会発表会場は近畿大学11月ホール、総合社会学部G館の二か所とし、11月ホールでは特別シンポジウム、名誉会員推戴式、学会賞授賞式、学会賞受賞講演を執り行った。また、11月ホールロビーでは、若手・一般ポスター発表ならびに企業展示を行った。G館には受付、一般講演会場、大会本部を設けた。総講演数は689件（研究懇談会講演、受賞講演、シンポジウム講演含む）、参加登録者数は1156名であった。

本年会では、いろいろ新しい試みを行った。これまで要旨集は冊子を印刷製本し、学会当日受付にて配布（販売）していたが、要旨集の印刷製本を止め、インターネット上で閲覧、ダウンロードする方式に切り替えた。ただし、要旨集の閲覧、ダウンロードは参加登録した会員のみとした。（正確には第73回分析化学討論会が最初）。発表形態については、口頭発表は三つに分け、これまでの一般講演（15分）に加え、依頼講演（20分）と若手講演（10分）を設けた。依頼講演は各分野のプログラム編集委員から、その分野のトピックス的な研究を行っている研究者に講演を依頼した。若手講演は若手研究者が初めての口頭発表をサポートする目的で設定し、発表時間は一般講演より短い10分と設定した。若手ポスター発表は口頭発表とは重ならない時間に実施することとして、奇数番号の発表は12時から13時、偶数番号の発表は13時から14時とした。さらに若手ポスター賞は本年会では審査結果をボード上に公表し、最も得点の高い若手研究者を表彰した。

2 講演

[プログラム責任者：前田耕治（京都工芸繊維大学）・鈴木茂生（近畿大学薬学部）、会場責任者：宗林由樹（京都大学化学研究所）・中口 譲（近畿大学理工学部）、若手ポスター責任者：床波志保（大阪府立大学21世紀科学研究機構）・宇田亮子（奈良工業高等専門学校）・森澤勇介（近畿大学理工学部）]

一般講演、依頼講演、若手講演（317件）はG館の11会場にて行われた。講演は従来どおり、講演者がPCを持ち込み、休憩時間を兼ねたPC設定時間を設け、PC切替機に複数のPCを接続する方法を踏襲した。PCに関しては特に大きな問題は生じなかった。

研究懇談会講演は関連するセッションの最後に行われ、1日目の午前に7件、午後に6件、2日目の午前に8件、3日目の午前に3件の合計24件が行われた。

ポスター発表は11月ホールロビーにて行われた。1日目には若手ポスター発表165件が行われた。100名近い審査員によ

表1 第62年会分類別講演申込および聴講者一覧表

| 分類 | 一般講演 (口頭) | 若手 ポスター (口頭) | テク ニク ス レビュー | 最大 聴講 者数 | 一般 ポス ター | 若手 ポス ター |
|-------------------|--------------|--------------------|-----------------------|----------------|----------------|----------------|
| 01：原子スペクトル分析 | 15 | 2 | | 83 | 10 | 8 |
| 02：分子スペクトル分析 | 12 | 2 | | 36 | 6 | 10 |
| 03：レーザー分光分析 | 3 | 7 | | 38 | 1 | 3 |
| 04：X線分析・電子分光分析 | 4 | 4 | | 57 | 5 | 5 |
| 05：放射化学分析 | | | | | | |
| 06：NMR, ESR, 磁気分析 | 2 | | | 21 | 1 | |
| 07：電気化学分析 | 17 | 6 | | 56 | 3 | 17 |
| 08：センサー、センシングシステム | 16 | 6 | | | 5 | 12 |
| 09：熱分析 | | | | | 1 | |
| 10：有機微量分析 | | | 1 | 20 | | 1 |
| 11：質量分析 | 5 | | | 49 | 4 | 3 |
| 12：マイクロ分析系 | 9 | 2 | | 34 | 2 | 7 |
| 13：フローインジェクション分析 | 9 | 9 | | 49 | 2 | 2 |
| 14：液体クロマトグラフィー | 8 | 5 | 1 | 76 | 21 | 11 |
| 15：ガスクロマトグラフィー | 4 | | | 61 | | |
| 16：電気泳動分析 | 5 | 2 | | 35 | 4 | 5 |
| 17：溶媒・固相抽出法 | 10 | 2 | | 51 | 8 | 11 |
| 18：分離・分析試薬 | 9 | 4 | 1 | 45 | 1 | 7 |
| 19：分析化学反応基礎論 | | 1 | | 38 | 2 | 2 |
| 20：データ処理論 | 1 | | | 38 | 1 | |
| 21：標準試料 | 2 | | | 38 | 1 | |
| 22：サンプリング、前処理 | 1 | | | 38 | 2 | 3 |
| 23：界面・微粒子分析 | 23 | 6 | | 60 | 6 | 14 |
| 24：宇宙・地球 | 13 | 2 | | 48 | 8 | 7 |
| 25：地球環境関連分析 | 14 | 7 | | 80 | 22 | 11 |
| 26：無機・金属材料分析 | 1 | | | 83 | 2 | |
| 27：有機・高分子材料分析 | 7 | 2 | | 44 | 3 | 1 |
| 28：生体・医薬・臨床 | 8 | 3 | | 52 | 12 | 5 |
| 29：バイオ分析 | 37 | 7 | | 90 | 4 | 15 |
| 30：その他 | 3 | | | | 3 | 5 |
| 合計 | 238 | 79 | 3 | | 140 | 165 |



学会会場



若手ポスター会場



企業展示会場



若手ポスター賞授賞式

る厳正なる審査の結果、このうち12件が若手ポスター賞に選ばれた。3日目には一般ポスター発表140件が行われた。11月ホールロビーはかなり広いスペースであったので、若手ポスター、一般ポスターすべて掲示することができた。発表時間は120分（奇数・偶数番号それぞれ60分間）と例年より長めに設定した。

3 特別シンポジウム

第62年会では公開シンポジウムを含め、六つの特別シンポジウムが開催された。

- (1) 「地球・環境・放射能と分析化学—東日本大震災から2年半、冷静な眼で福島第一原子力発電所事故を見つめ直す—」(9月10日午前) [オーガナイザー：杉山雅人(京都大)・山崎秀夫(近畿大理工), 最大聴講者数110名]
- (2) 「社会科学と分析化学」(9月10日午後) [オーガナイザー：辻 幸一(大阪市立大理工), 最大聴講者数250名]
- (3) 「計算科学と分析化学」(9月10日午後) [オーガナイザー：山本雅博(甲南大理工), 最大聴講者数50名]
- (4) 「医学・薬学と分析化学」(9月11日午前) [オーガナイザー：萩中 淳(武庫川女子大薬), 最大聴講者数140名]
- (5) 「ものづくりを支える分析化学」(産学連携企画 公開シンポジウム)(9月11日午前) [オーガナイザー：大塚利行(神大院理)・中山茂吉(住友電工), 最大聴講者数100名]
- (6) 「基礎科学のなかの分析化学教育」(公開シンポジウム)(9月12日午前) [オーガナイザー：加納健司(京大院農)・樋上照男(信州大理), 最大聴講者数150名]

4 付設展示会, ランチョンセミナー, テクノレビュー

11月ホールロビーにて付設展示会が開催された。今回は機器展示に28社(30ブース)のご協力をいただいた。例年どおりポスター会場内で展示会を開催したため、多くの来場者があり展示各社からはおおむね好評であった。

1日目、2日目の昼休み8社によるランチョンセミナーが開催された。1日目は若手ポスター発表とランチョンセミナーの時間が重なっていたため、ポスター会場に人が流れ、ランチョンセミナーへの参加人数が当初の予定を下回った会場もあり、ランチョンセミナーを企画していただいた企業の方々にご迷惑をおかけしたことは反省材料である。また本年会では3件のテクノレビュー講演が行われた。機能性発光錯体の合成、微量分析のための新たな超純水装置の開発、新しいHPLC分離シ



名誉会員推戴式

ステムによるアミノ酸とジペプチド類の高速高分離分析法の紹介が行われた。

5 名誉会員推戴式, 学会賞等授賞式, 学会賞講演など

名誉会員推戴式, 学会賞等授賞式および学会賞受賞講演は2日目の13時30分より11月ホールにて行われた。寺前紀夫日本分析化学会会長の挨拶の後、名誉会員推戴式が行われ、続いて、学会賞、奨励賞、学会功労賞、技術功績賞、先端分析技術賞(JAIMA 機器開発賞, CERI 評価技術賞)、有功賞の審査結果が各審査委員長から報告され、受賞者に賞状と副賞が授与された。授賞式の後、有功賞受賞者の記念撮影が11月ホール前にて行われた。その後14時35分より角田欣一氏、早川和一氏、山口敏男氏による学会賞受賞講演が行われた。技術功績賞の浦信夫氏、落合周吉氏、丸田俊久氏、奨励賞の青田 新氏、遠藤達郎氏、大平慎一氏、床波志保氏、水野 初氏、JAIMA賞の谷口一雄氏、長谷川 健氏、CERI賞の戸田 敬氏の受賞講演は関連する一般講演会場で行われた。

6 ミキサーおよび懇親会

ミキサー [責任者：森澤勇介氏(近畿大理工)] は1日目の18時より111名(一般65名, 学生46名)の参加者を得て、近畿大学Eキャンパス Blossom Caféにて行われた。加納健司氏(日本分析化学会近畿支部長)の挨拶の後ミキサーが始まり、18時30分より若手ポスター賞の授賞式が始まった。まず床波



懇親会・近大マグロ解体ショー



年会受付



特別シンポジウム

志保氏による若手ポスター賞の選考方法について説明の後、掛樋一晃第62年会実行委員長より賞状と副賞の授与が行われた。しばらくの歓談の後、加納健司氏よりミキサー参加者（各テーブル1名）が指名され、スピーチが行われた。また若手ポスター賞受賞者の代表によるスピーチが行われた。最後に大塚利行氏より閉会の挨拶をしていただいた。

懇親会〔責任者：大塚利行氏（神大院理）・吉田裕美氏（京都工芸繊維大）・鈴木茂生氏（近畿大薬）・中口 譲氏（近畿大理工）〕は2日目18時よりセラトン都ホテル大阪（大阪市天王寺区上本町）にて行われた。300名の参加のもと大塚利行氏、吉田裕美氏の司会進行により始まった。掛樋一晃年会実行委員長、寺前紀夫会長の挨拶、浅井彰二郎JAIMA理事、塩崎均近畿大学学長の来賓挨拶の後、兵庫県立大名誉教授の寺部茂氏の乾杯のご発声にて懇親会が開宴した。しばらく歓談した後、アトラクション担当の鈴木茂生氏（近畿大薬）に進行が代わり、近畿大学の養殖技術についての説明の後、近畿大学が世界に誇る養殖魚「クロマグロ」の解体ショーが行われた。最近開店した商業施設「グランフロント大阪」に近畿大学水産研究所（レストラン）を出店している関係で、大学関係者も入手困難となっているクロマグロではあったが、実行委員長の努力の甲斐もあり入手できたとのこと、懇親会参加者には大好評であった。また、大阪名物、たこ焼き、お好み焼き、きつねうどんの屋台も用意されたが会の終わりにはすべてなくなるほど盛況であった。会の終盤では、次年度開催される第74回討論会の平山和雄実行委員長（日大工）、第63年会の藤原原文実行委員長（広大院理）より挨拶をいただいた。20時をもって加納健司近畿支部長が中締め挨拶を行い、それに続いて紀本岳志氏、渡曾 仁氏による「一本締め」で会はお開きとなった。

7 その他

今回の年会では、発表会場を、道路を隔てた2か所で実施

したため、会場を移動する多くの参加者には大変不便をかけた。近畿大学構内でポスター発表に使える会場は11月ホールロビーと記念会館の2か所であり、移動のことを考えると11月ホールロビーが最も適していた。また、昨年の年会（金沢大学）でも提供されていたが、近畿大学総合情報システム部の協力により無線LANを利用できるようインターネット接続を提供した。

8 おわりに

9月初旬の大阪は残暑も厳しく学会期間中は多くの参加者が暑いと感じられたと思う。第62年会にご参加いただいた会員、出展していただいた企業関係者の方々にお礼を申し上げます。また本年会を開催するに当たりご協力いただいた日本分析化学会近畿支部の大学関係、公的機関、企業などの会員で構成された実行委員会の皆様、会場を提供していただいた近畿大学の担当部署の皆様、当日会場運営や雑務に協力していただいた学生アルバイトの皆様にお礼申し上げます。

今回の年会では紙媒体の要旨集の配布は行わなかった。その代わりに要旨集は年会ホームページ上で会場別または一括でダウンロードできるようにした。会場でもパソコンにダウンロードできるよう無線LANを利用したインターネット接続を提供させていただいた。プログラム集も編集方法を大きく変えた。学会賞受賞講演、技術功績賞、奨励賞、JAIMA賞、CERI賞、特別シンポジウム（公開シンポジウム含む）の要旨原稿は掲載した。研究発表プログラムについてはこれまで2段となっていたものを、1段にした。ページ数は増えたが見やすくなったと思う。

要旨集の電子データ化は自然の成り行きかもしれないが、その一方で、要旨集が配布されなかったことへのご批判「紙媒体を配布しないのであればせめてUSBやCDで配布してほしい」も頂戴した。これまで休憩時間に紙の要旨集をばらばらめくっているときに思わぬ研究結果に遭遇し、新たなアイデアが浮かんだこともあるかもしれない。要旨集の電子データ化については、今後学会を開催する機関でもう一度ご議論していただきたいと思う。

今回の若手ポスター賞は「審査結果の透明性を確保すること」を第一の目的として、審査結果を公表させていただいた。審査結果を公表した意図は、例えば、あと少しのところを受賞を逃してしまった学生は、次回は頑張ろうと努力してもらい、得点が少なく評価の低かった学生は当初は落ち込むかもしれないが、その悔しさを今後の研究に生かしてほしいという願いが込められている。また今回の審査方法では審査員の負担は増えたが、集計の手間が省けて、審査後1時間程度で結果が公表できたというメリットもあった。

近畿大学副学長・薬学部教授 掛樋一晃
近畿大学理工学部 中口 譲